

第8回「新鋭俳句賞」一覧表

正賞
準賞

NO	氏名	年齢	題
08	六車 佳奈	42	春空
17	磐田 小	23	耳
18	坂西 涼太	46	まじろぎ
19	南 幸佑	19	ほとけのこゑ
20	北杜 駿	34	しろたへ
28	倉持 梨恵	46	輪郭
32	庄田 ひろふみ	47	士篤恒
33	藤井 万里	20	函紙
41	稲畑 航平	41	しあはせ
42	前田 拓	36	胸に針
44	吉田 哲二	44	肩の山
50	高橋 真美	46	銀紙
55	味八木 恭子	47	脈狂ふ
57	池田 瑠那	47	光
60	宮崎 淳	43	行く春
61	塚本 櫻魚	24	鳥瞰図

第8回 新鋭俳句賞
候補作品集

2024. 10

公益社団法人 俳人協会

第8回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】 作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

受付番号	題	頁
8	春空	2
17	耳	3
18	まじろぎ	4
19	ほとけのこゑ	5
20	しろたへ	6
28	輪郭	7
32	士篤恒	8
33	画鋏	9
41	しあはせ	10
42	胸に針	11
44	肩の山	12
50	銀紙	13
55	脈狂ふ	14
57	光	15
60	行く春	16
61	鳥瞰図	17

- 1 あたたかや阿修羅のむねのふくらみも
- 2 欄間より漏れて小暗き雛あかり
- 3 啓蟄やちくわに通す棒チーズ
- 4 初蝶をつまむ少年押し黙り
- 5 うぐひすの喉くれなるに歌ひつぐ
- 6 遷都よりはじまる年譜初ざくら
- 7 花衣衣桁に羽根とひらきけり
- 8 栓ゆるき七味をまはす花の昼
- 9 休学の姉よさくらを眩しみて
- 10 龍鱗も混じつてゐたり飛花落花
- 11 蜘蛛の巣に花懸かりをり錆びてをり
- 12 夜桜に天上の紺さざめいて
- 13 苗木売る顔の高さに袋吊り
- 14 つちふるやアンモナイトの青の艶
- 15 六歳の言葉のリズムクロッカス
- 16 校門の砦のごとし鳥雲に
- 17 さへづりに午後の診察はじめけり
- 18 つなぐ手を書店にほどく日永かな
- 19 吊革に拳の固き新社員
- 20 竹秋や撞木の先の飴色に
- 21 メレンゲの山なみ生るる遅日かな
- 22 春筍を掘るや跳ぶ土みづみづし
- 23 まるまつて眠る靴下目借時
- 24 春土用捻じつて開けるスパム缶
- 25 花びらの翅脈の透けて豆の花
- 26 春の暮花瓶の水のうすにごり
- 27 あをぞらを大きく深く鳶の恋
- 28 釣人の朧を踏んであらはるる
- 29 春空へ広がるつばさ誕生日
- 30 地球儀はいつも快晴燕来る

- 1 初蝶を呼ぶ声が追ひぬいていく
- 2 囀りの解かれていく湖水かな
- 3 入試果つ富士がきれいとい機長より
- 4 世の中に四角いプリン春の雪
- 5 鶴鴿の旋回小さし夕桜
- 6 いつぼんの芹は錫杖めいて水
- 7 桜散る嘴のふれあつてゐる
- 8 一輪を大きく欠けて白牡丹
- 9 だまし絵を天道虫や登り切る
- 10 夏蝶のいまこときれし水の紋
- 11 夕焼や百年波を聴くピアノ
- 12 この星の地平水平サングラス
- 13 蔦青し展望台のオムライス
- 14 噴水のでつぺんは雨待つところ
- 15 吹き漏れて息の太さや祭笛
- 16 鶏頭や次のページの英字透く
- 17 金管の音そろひたる秋の昼
- 18 露草や仕事の父を見に來たり
- 19 豊の秋火花の落ちてなほ赫し
- 20 秋の雲化石に耳の無かりけり
- 21 捨てられし舟を見に行く花野かな
- 22 朝月へ鉄塔の陰重ならず
- 23 半島の高きところの秋灯
- 24 橋脚の方の深き冬の山
- 25 夜を雪神樂の鈴を振りしより
- 26 息白く神々の名を唱へけり
- 27 聖樹なり雪をほりおこしてみれば
- 28 旗のなきポールの列や冴え渡る
- 29 水仙や動物園の檻に窓
- 30 白狼の片耳のなき水雨かな

1 針山に針の陣立寒日和

2 戻りくる顔ほころばせ寒稽古

3 豆撒を終へて空家となりにけり

4 あこのゑのわらふひとびとあたたかし

5 ポケットにしのはすひよこ春炬燵

6 レコードの針春塵にとびとびに

7 大仏のくすぐつたげな春の風

8 まだ拭かぬ遅日の駅の伝言板

9 春灯や古書肆の奥にまだ奥が

10 壺焼のごろんとひとつ海を向く

11 春ゆくにまだ輪回しをしてゐる絵

12 航雲のあじさゐるを出てあじさゐへ

13 明易やマネキンのまだ裸ンぼ

14 鯨折の鯨怯えゐし折の隅

15 バンザイを倒に干す入梅晴

16 石仏の笑みびつしりと苔茂る

17 びいどろの風鈴影を結び合ふ

18 青田波牛乳箱のかたかたと

19 ベーゴマの匂ひ残る手涼新た

20 夕さりに伸ばすアンテナ御巢鷹忌

21 手拭を座卓に咬ませ盆の月

22 ちんどん屋行つて了ひぬ狐花

23 鷹の爪米櫃の窓覗き合ふ

24 威勢よく開くおかもち秋灯下

25 まじろぎもせぬ落鮎に化粧塩

26 鬼事のこゑの間近や残る菊

27 深秋の即席麵に湯を満たす

28 七五三下駄履く父の写りゐし

29 チョーク短しストーブの火の盛ん

30 紙漉の太き二の腕漉きかへす

- 1 青鳶のそよげる闇に佇ちにけり
- 2 山羊老いて土蹴るばかり薄暑光
- 3 死が遠し葵の花の濃くれなる
- 4 夏瘦や鏡あるたび髪に触れ
- 5 昼寝人柳の影が手に膝に
- 6 白服同士話せる廊をひとり抜けぬ
- 7 立ち出でて鬼灯市の風にあり
- 8 湯上がりの頭ふらつく鉦叩
- 9 あふられし葛葉かゞやく残暑かな
- 10 かまつかや野ほとけてふを宿屋の名
- 11 竹林を白蝶よぎる厄日かな
- 12 二階より見てゐて松の手入れかな
- 13 倚れば動く卓袱台に秋惜しみけり
- 14 木枯や油まみれに缶の蓋
- 15 半地下の書肆はつふゆのひかり差す
- 16 千両やつながれて犬をちこち見
- 17 道問はれ子どもはにかむ干菜かな
- 18 吹かれゐて松うごかずよ薬喰
- 19 飛ぶものの足さびしさよ煤払
- 20 包丁を拭きつゝ絵双六覗く
- 21 楡に風雲に風くる冬帽子
- 22 丈六のくわんおんにして霰かな
- 23 草枯の只中にある大あくび
- 24 寒明の波あそぶなり小名木川
- 25 壺焼やほとけのこゑを誰も知らず
- 26 生え際をあをあを涅槃し給へり
- 27 鳴き継げる蛙くはへしまゝに飛ぶ
- 28 海といふ一字を恃み卒業す
- 29 雨ほそき夜の芽柳に別れ来し
- 30 スニーカー苗札傾がしめ去りぬ

しろたへ

- 1 ひぐらしや止めても熱きボンネット
- 2 黍嵐ちからまかせに牛吼ゆる
- 3 威銃あとは真青な空ばかり
- 4 冷やかな仔牛の黒瞳耳標揺る
- 5 鯖雲の焼かれさうなる日暮かな
- 6 夜半の秋小さきいのちふむ妻
- 7 九年母の厚皮吾子は胎ふかく
- 8 雪降りて雪のにはひの作業服
- 9 測量のレンズの中の雪景色
- 10 杭抜きて寒気残れる杭の穴
- 11 雪の原いま新しき杭を打つ
- 12 雪しまき掌に金づちの肉刺やはと
- 13 凍杭を打ちつづく黙打ちつづく
- 14 ストープの炎に測量の手をほぐす
- 15 冬ぬくし胎より声のしたやうな
- 16 蜜柑剥く夜をしづかに迎へつつ
- 17 羊水の中のしあはせ寒卵
- 18 しろたへの春の産着の紐ほどく
- 19 産褥の肩へふはりと春シヨール
- 20 うららかや読めぬし書けぬ篆書体
- 21 両袖の折目正しく紙雛
- 22 春昼やサビ繰り返す子守唄
- 23 春燈のちりんとありぬ夜泣子よ
- 24 春愁やおのづと終るオルゴール
- 25 新樹雨みどりがとろけだしさうな
- 26 嬰兒を縦に横にと抱く薄暑
- 27 緑の夜寝息ひとつに睡る母子
- 28 あつさりと去年を脱ぎ捨て今年竹
- 29 五月雨や湯花ひらけば貝ひらく
- 30 研ぐたびに澄む米汁や晩夏光

- 1 日傘閉ぢ八本の骨犇めきぬ
- 2 ひたすらに休む休日氷菓子
- 3 駅前誰かが誰か待つ立夏
- 4 草いきれ四肢投げ出して眠る馬
- 5 飽きるほど通ひたる道花梯梧
- 6 藍浴衣髪に挿し込む髪飾り
- 7 白鶴鴿人の近くに降りきたる
- 8 見てゐないテレビ明るき夜長かな
- 9 秋気澄む便箋の文字あふれたる
- 10 灯火親し膝には乗らぬ猫二匹
- 11 十六夜や電気ケトルの湯気溢れ
- 12 教会の鐘の残響秋高し
- 13 秋の蝶飛び輪郭の薄れたる
- 14 行く秋の雨音聞きながら仕事
- 15 狐火やグラス一杯分の酔ひ
- 16 予報なき雨に傘買ふ師走かな
- 17 行く年やその後を知らぬ人ばかり
- 18 元日の無人駅から無人駅
- 19 動かざる寒鯉の鱗やはらかし
- 20 寒卵割るや二度目に入る罅
- 21 しづり雪改札口に歩をゆるめ
- 22 てのひらの葉とりどり春隣
- 23 楠若葉大きく曲がるベビーカー
- 24 さくら餅一本残る親知らず
- 25 通学の坂道ふたつ初ざくら
- 26 枕辺に体温計と春の宵
- 27 休館の暗き入口花菜風
- 28 風に散り雨に散らばる桜かな
- 29 タクシーのゆるき方言花は葉に
- 30 一羽たち一斉に翔つ春の鳥

- 1 王宮は島の高きに秋澄めり
- 2 鳥雲に線の鋭き解剖図
- 3 揉み合へる船と舳や青嵐
- 4 つばくろや低く揃へる街の屋根
- 5 船着ける街の裏側秋桜
- 6 噴水の吹かれて海へこぼれけり
- 7 冬麗やどこからも海見ゆる街
- 8 本の背に本の番号秋深む
- 9 天窓に金の飾りや冬の朝
- 10 色鳥や露店に小さき車輪止め
- 11 春隣ドアの下より入る手紙
- 12 夏至祭のポール一氣に立ち上がる
- 13 色のなき足跡続く春の雪
- 14 花冷や蓋硬く締め塩の瓶
- 15 春月を見つけし頬の湿りかな
- 16 塩漬けの魚の目濁る暮の春
- 17 鷹鳩と化す背表紙に小さき絵
- 18 詩の神の名を持つ道やゼラニウム
- 19 小春日や絵本の棚のよく廻る
- 20 画鋏刺す霜夜の深きところまで
- 21 長き夜や表紙の厚き本開く
- 22 銅像の掌に錆若葉冷
- 23 メモあまた貼られし壁や風光る
- 24 春寒や拭ひて厚き刃の脂
- 25 春灯の連なり湾を抱きけり
- 26 見るたびに野遊びの子の替りけり
- 27 ふらここの縄荒れてをり島の庭
- 28 夏霧へ深く入りたる舳先かな
- 29 緑陰や鉄扉導く蝶番
- 30 夏潮や教会の鐘揺れやまず

- 1 瓶はなほ薬のにはひ桐の花
- 2 蛇の眼の破れさうなる青さかな
- 3 四阿の梁の御札やほととぎす
- 4 紫陽花の裏へ元栓閉めにゆく
- 5 僧堂と書いて郵便受涼し
- 6 六月の指を熱がる赤ん坊
- 7 さつきまで木の揺れてゐし羽抜鶏
- 8 水鉄砲にはかに水の減りにけり
- 9 横の卓蜘蛛の話をしてをりぬ
- 10 梅雨茸汁がへこみに膨らみに
- 11 雨粒のごとく一人や夏書僧
- 12 夏服や拳ほどけばゑのこ草
- 13 座布団に木魚の沈む茄子の花
- 14 大人しく瓶を出てくるビールかな
- 15 虫干や鳥迷ひなく枝のうへ
- 16 花束をとことこ運ぶ残暑かな
- 17 草市のみな待人のゐるやうに
- 18 菜屑つく菜虫のところどころかな
- 19 商談や御僧にして秋扇
- 20 金物の少なき寺の水澄める
- 21 露の玉増えず減らずの野菜かな
- 22 ただ翅をひらき蠓螂抗ひぬ
- 23 夕風の向かうへ夕日癩祭忌
- 24 月祀りをり内股を言はれをり
- 25 てのひらで押し込む画鋏鴨来る
- 26 日向から日向に糸瓜垂れさがり
- 27 水よりも湯の重たくて秋の山
- 28 天窓の近きと思ふ夜食かな
- 29 刈蘆を足蹴に別の蘆刈れり
- 30 全員の見てゐる雨と藤の実と

- 1 月涼し易しく話す名の由来
- 2 蜜豆を膝の子へ落とさぬやうに
- 3 土産屋の通路の狭き夕立かな
- 4 太宰忌や夜より暗き夜の川
- 5 真つ当なること儲からぬ夏の草
- 6 夏風邪の子としあはせの約束を
- 7 よく揃ふ祭太鼓の撥の振り
- 8 観衆へねぶたの態とつんのめる
- 9 霧の海盆地は街を容るゝ坏
- 10 一斉に鳴る踊子の草履かな
- 11 耳塞げうちの花火は腹で聴け
- 12 鳴き終はり直ちに跳ぬる鉦叩
- 13 落雁や忘るゝための旅のあり
- 14 なに／＼といち／＼集ふ文化の日
- 15 雪催ひ任地のことは真似てみる
- 16 玄関の子の訥々と着膨れぬ
- 17 梵天に倚り男衆の嗤ひ合ふ
- 18 すが漏や猫の親子のごとく寝ぬ
- 19 土も葉も巻き込んでゐる雪達磨
- 20 白鳥のなめらかに羽畳みけり
- 21 凍道を幾度も振り返りつゝ
- 22 雛納この娘はずつと喋つとる
- 23 ハイウエイは明るき奈落春驟雨
- 24 亀鳴くや便座の絶えず温められ
- 25 はらわたのあらはに黒き蛙の子
- 26 夜の底に蛙へ成りかけているもの
- 27 ヒヤシンス宵のはじめのごとき朝
- 28 みづうみに哀しき神話緑さす
- 29 砂の山搔き上げ肩に汗拭ふ
- 30 はつ夏や子供はひかりだと思ふ

- 1 飛び込みの前の爪先揃ひけり
- 2 ハンモック聞こえぬやうに言ひ返し
- 3 兜虫赤子の柔き頭蓋骨
- 4 蟻地獄ふたつの並ぶ地中かな
- 5 卍にも書き順のあり蟻の道
- 6 抜かれたる鰻の骨の動きをり
- 7 盆の月二段ベッドの下が兄
- 8 犬小屋の釘の曲がりし残暑かな
- 9 墓参り帰りに鳥の鳴きにけり
- 10 岩肌に鱗の残り鮭のぼる
- 11 剥き出しに考へてゐる鶏頭花
- 12 石叩き分け隔てなく叩きけり
- 13 印刷の途中引き抜く秋うらら
- 14 運動会別々に来る父と母
- 15 水平の肩疲れるる案山子かな
- 16 花嫁の言葉の途切れ草の花
- 17 人形は手相を持たず十三夜
- 18 信長の胸に針刺す菊師かな
- 19 神の留守下より辿るあみだくじ
- 20 初氷コンパスの線すれ違ふ
- 21 大根の葉のひらききるものを引き
- 22 クリスマス子の仰ぎたる換気扇
- 23 両足に挟む大空梯子乗
- 24 学校の備品の日付鳥の恋
- 25 持ち上ぐるときのさざなみ金魚玉
- 26 螢籠大人の部屋へ移さるる
- 27 防犯のシールの目玉青葉木菟
- 28 梅雨晴やごみ集めたる大磁石
- 29 軽鳧の子の白線の上歩みけり
- 30 高くなる糞ころがしの後ろ脚

肩の山

- 1 片付けも一日のうちに春祭
 2 卒業式の先生のある車輛かな
 3 春の野に置けば濡れたるふくらはぎ
 4 はくれんの今年も雨にまみえたる
 5 初蝶の曇天色に生まれけり
 6 鍵よりも多き鍵穴地虫出づ
 7 二階には妻と子のゐて菜種梅雨
 8 蛇口まで烏来てゐる五月かな
 9 入場門の裏側粗なり南風吹く
 10 踏石の下ゆく蟻と越ゆる蟻
 11 子を抱けばみしと床鳴る青嵐
 12 雨蛙一枝にすがり登りけり
 13 香水や肘より垂るるほつれ糸
 14 受話器持つ反対の手の団扇かな
 15 小銭見えなくて誘蛾灯に寄る
 16 見る限り棗は熟れて窓に猫
 17 物足りぬすべり台なり鱗雲
 18 向かう側からも見てゐる破蓮
 19 桐箱の中の鋏や烏兜
 20 米櫃へ米注ぐ音文化の日
 21 木の葉散るもとよりさざめける水面
 22 煮凝や酔ひどれの人爪きれい
 23 靴紐を直すラガーの肩の山
 24 暗転にイエスを抱かす聖夜劇
 25 切られたる鰯の倒れぬ厚さかな
 26 締め上げてスケート靴に捕らはるる
 27 湿り気のあるグローブや冬堇
 28 大仰なこと聞いてをり春の雪
 29 堤焼く人ゆつくりと沿うてゆく
 30 電球交換見上げてゐたり春遅々と

- 1 薄氷水からすこし浮いてゐる
 2 静電気たまりし涅槃絵解かな
 3 考へるために組む腕春の風
 4 ありあまるものに男や桜貝
 5 沈丁花死者の口紅は落ちない
 6 折るたびに曇る銀紙花の冷
 7 醤油濃く匂ひたちたる虚子忌かな
 8 しばらくを水にまかせて蝌蚪止まる
 9 花籠の花抜くやうに春行けり
 10 五月雨やきれいに割れるカレールー
 11 犬が鼻押しつけてゐる網戸かな
 12 夏の月水風船のなかの波
 13 アロハシャツ着るに伺ひ立ててをり
 14 暮水くちやくちやにしてしまふ
 15 まつすぐに立つて日傘をかたむけて
 16 蚊を見失ひたるワインセラーかな
 17 花蓮や鉛筆立てにすくと筆
 18 秋立つやギターをのせる足の甲
 19 闇に口あるかに花火喰らふかに
 20 とびちつてばつたさびしきいろばかり
 21 仙人掌にかかる秋刀魚の煙かな
 22 白粉花の咲いてどんだん内股に
 23 木犀のほひのなかに神話読む
 24 孫の手の障子の前に置いてある
 25 剥がれたるシールの角や風邪心地
 26 あれこれと持たせてセロリ持たせない
 27 左義長の火に遅れたる火の匂ひ
 28 目を瞑るちから水鳥浮くちから
 29 てのひらに炬燵の底を探らせる
 30 模造紙のてろんと折れて日脚伸ぶ

- 1 双蝶や森に酸つばき風の吹く
- 2 白木蓮のみるみる錆びる昼餉時
- 3 やはらかき蜘蛛眠らせる堇かな
- 4 野遊や毒よと云はれ手渡され
- 5 春セーター後部座席に埋もれて
- 6 口の渴くは一面の躑躅のせゐ
- 7 空部屋の窓の深さよ花の雨
- 8 楠若葉けふ静脈のよく見ゆる
- 9 青梅を投げて全き飛沫かな
- 10 夏の蝶蜜吸ひきつてより弛ぶ
- 11 白日傘顔をとほくに置き忘れ
- 12 黄菖蒲につんと冷たき芯のあり
- 13 螢の滅のあはひに息を継ぎ
- 14 飛び込みのうすき己を抱きたる
- 15 蝉声を骨に残して眠りけり
- 16 青野ひかりて少しづづ脈狂ふ
- 17 掌のうちには木犀の香の濁るまで
- 18 銀杏散る奥へ奥へと目は奔り
- 19 熟柿その水の重みに坐るなり
- 20 線描のよこがほ無花果の匂ふ
- 21 祈りなど知らぬ黄葉閃けば
- 22 項垂れて枯芝に濃き影を曳く
- 23 寒星や息吹きかけて拭く眼鏡
- 24 口琴に風の生まるる氷柱かな
- 25 堅さうな水を叩ける白鳥よ
- 26 寒鯉の沈む水面に見し焰
- 27 水仙のあたり歓声吹き溜まる
- 28 全身をペダルに乗せて落葉時
- 29 探梅の耀ふ髪を見てゐたり
- 30 喉奥に留めたきこゑ冬木の芽

- 1 木の箱にとどく牛乳花三分
- 2 シラバスに付箋増えたり花の昼
- 3 上腹身焼けば火ばしら桜どき
- 4 夕桜団地まばらに燈りけり
- 5 女子大の屋根に頂塔春の雲
- 6 大学構内鹿は落花を食むばかり
- 7 さへづりやヨガのポーズに天支ふ
- 8 ヨガマット巻くや若芝はらひつつ
- 9 花の夜や新湯に伸ばす我が手足
- 10 金網を抜け花吹雪なほ浮上
- 11 響板に山葉の標みどりさす
- 12 葉桜や百年を経て鳴るピアノ
- 13 トロイメライ弾くや夕焼いよ濃き
- 14 冷し飴はじめましたと女手蹟に
- 15 鳳凰の透し彫りあり緋の団扇
- 16 楠大樹茂るよ虚深けれど
- 17 踏み入りて樹洞芳し夏休
- 18 八月の防火バケツの水照りかな
- 19 朝顔や飯三合を土鍋炊き
- 20 亀石の亀の半眼柿たわわ
- 21 柞降りつぐしろがねの光曳き
- 22 背負子いつぱい刈りし葛の葉山羊に遣る
- 23 山羊二頭葛の葉遣れば競ひ食ひ
- 24 秋晴や咀嚼にうごき山羊の鬣
- 25 紺青の宙より鷺急降下
- 26 鬼の雪隠大根畑のただなかに
- 27 さざんくわに風鐸の音をさびしめる
- 28 飛鳥仏御顔面長冬あたたか
- 29 祀られて入鹿の首級刈田なか
- 30 凍雲の厚くも洩るる光かな

行く春

- 1 自販機で缶のコーラを新樹の夜
- 2 白シャツを着て休日を慎める
- 3 薔薇を買ひ聖火を運ぶごと帰る
- 4 南国の音楽をかけ昼寝かな
- 5 白靴や仕事のことは考へず
- 6 つかの間の互ひの無言冷し酒
- 7 従ふが男の意地や雲の峰
- 8 信号のままなく青へ星祭
- 9 木犀や傘の内まで香のとどき
- 10 探鳥の秋風の音聴くばかり
- 11 先輩が眼鏡をかけて秋の暮
- 12 湯につかるごとくベンチに鴉日和
- 13 身に入むや花捨つるため茎を折り
- 14 さむきこと誰にも言へぬ寒さかな
- 15 鯛焼の三つを今日の褒美とす
- 16 少しだけ読書の時間クリスマス
- 17 映画見て思ふことあり日記買ふ
- 18 行く年といふ大いなる船の中
- 19 読初や眼鏡を拭きて心決め
- 20 音楽で消す冴ゆる夜の静けさを
- 21 春近しブックエンドの位置変はり
- 22 バスケットシューズまだあり春の雨
- 23 青空の青の中なり初桜
- 24 休日ハンチング帽春の風
- 25 鳥の去りしじま生まるる桜かな
- 26 アパートも歳月かさね春夕焼
- 27 平生を堇に向かひ省みる
- 28 ものの色さだまる雨や仏生会
- 29 気に入りのシャツに襟垢春惜しむ
- 30 行く春や雨は過客と思ひては

- 1 鳥瞰の地図もちだされ夏立ちぬ
- 2 水底に風の影ある山女魚かな
- 3 暮れ果つる青さに瀧の落ちにけり
- 4 うつし世の漁火みえて月涼し
- 5 風鈴市の風鈴ひとつ黙りこむ
- 6 すくはれて金魚の桶にのこる波
- 7 御神輿や火を宿すごと肩に瘤
- 8 喉をゆく漢方薬のすずしさよ
- 9 海霧にでてゆく船もありにけり
- 10 送り火や川ゆく足のおもかりき
- 11 読むひとに呼吸ありしや律の風
- 12 秋愁の門の向かうで嘶ける
- 13 大雨に陸稲の畝の潤びたる
- 14 色鳥や朝にふたつの島の影
- 15 鴟の贅ひらく眼のしめりたり
- 16 骸より蛆ながれくる秋の川
- 17 山澄みて半矢の鹿を隠したる
- 18 秋水をひた搔く權の冷えにけり
- 19 許されて古物あきなふ息白し
- 20 狩山の白樺もろく枯れゐたり
- 21 火の瞬る音のかすかや山眠れ
- 22 年の夜や檻の野犬の動かざる
- 23 汽車ゆれて乱るる文字や雪しぐれ
- 24 水涸れて鳥の静かなかたちかな
- 25 ゆびさきに煙草の匂ふ春の夢
- 26 木の根明く魁夷の馬の走り去る
- 27 旅をして墓ばかりみる水温む
- 28 山門にけもの棲みつく春時雨
- 29 鬼やがて花守となり風の音
- 30 明王の影も怒れば春逝けり